

市長記者会見記録

日時：2018年 2月21日（水）14時00分～14時30分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：市政一般

<内容>

《全国体カテストについて》

司会： ただいまより市長記者会見を始めます。本日の議題は市政一般となっております。

早速、質疑に入らせていただきますが、進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いたします。

幹事社： 幹事社です。お世話になります。

1点、幹事社からお尋ねしたいんですが、先日、スポーツ庁が公表した全国体カテストの結果なんですけれども、川崎市が全ての、20の政令市中で、中学生男女とも最下位という結果になってしまいました。状況としましては、4月に測定して、新年度になったばかりで測定したということも事情としてあるのかなと思いますが、この件についての受けとめと、何か考えておられることがございましたらお聞かせいただきたいと思います。

市長： 測定の時期というのはあるのかもしれませんが、ただ、総じて、本市もそうですし、神奈川県全体も例年、非常に成績が悪い状態が続いているということは事実でありますし、ほんとうに体力づくり、学力だけじゃなくて、いわゆる体力づくり、健康づくりというのはしっかりやっていくということがとても大事だと思っていますので、よく状況などを分析しながら、どういったことが、学校教育だけではなく、地域の中でどうやって体を動かしていくのかということも、当然学校とも連携してということになると思いますが、やっていかなければならないのではないかなとは思っております。

幹事社： ありがとうございます。

《市民アンケートについて》

幹事社： 同じく幹事社です。よろしくお願いたします。

昨日、概要版が発行された、かわさき市民アンケートなんですけど、部分的に抜き

出して、全体を捉えるということにはならないのかもしれないんですが、部分的に、定住の意向、これからも川崎市に住んでいたいというのが、最近、過去10年ぐらいを見ると微増というか、少しずつ増えている状況、減ったとしても1ポイントとかだったんですが、今回で3.2ポイントの低下というのが見られていて、今回だけの傾向なのか、それともこれからも続いてしまうのかというのは、まだ見ていかないとわからないと思いますが、市長の受けとめとか、どんなことが起因しているのかというのがもしありましたら伺えますか。

市長： そうですね。その次の問いで、総合的な生活環境の満足度という意味では、5年前に比べてでありますけれども、「満足している」、「まあ満足している」というのが71%だったのが、今回79.4%というふうに大幅に改善しているんですね。ですから、相当劇的に生活環境は満足しているという状況に、改善傾向にあるにもかかわらず、これからも住んでいたいという定住志向が減っているというのは、ちょっと何か、どういうふうに分析したらいいのかなというのは、もう少し詳しい分析はしてみたいなと思っています。

幹事社： わかりました。

《A I を活用した問い合わせ対応サービスについて》

幹事社： 全然別件なんですけど、市の問い合わせサービスにA I を活用する実証実験を始めたと思うんですが、これ以外でもA I を活用する場面というか、市政に関して、何か市長のお考えがあれば聞いておきたいなと思ったんですが。

市長： 三菱総研と一緒にやったのは今年が初めてではなくて、昨年度から取り組んでいますから、そういった意味では、前回よりもさらに、少し、一歩進んでという形で活用してきているので、今回のさらに実証を踏まえて、より今後の、どう市政全般にわたってA I を使っていけるのかということの可能性を探っていくという意味では、非常に有用な実証実験だと思っています。

報道もしていただいていますけれども、実際に市民利用ができるというところが、本市含めて7市ということでもありますし、これまで継続的にやっているのていくと、うちともう一団体、去年、2年連続でやっているのといったら、本当にごく少ないと思っていますので、そういった意味では、本市で行われている実証を、本市だけでなく他都市にも影響できるような、先導的な、モデル的な取り組みにしていきたいなと思っています。

幹事社： ありがとうございます。それでは、各社、質問ありましたらお願いします。

《川崎市の人口移動（転入超過）について》

記者： 先月末に総務省から人口移動報告というのが出ました。川崎市は、21年間連続で転入超過、他都市からの転入、21年連続の転入超過ということで、これについてのご感想をまずお聞かせいただきたいんですが。

市長： 素直に、選んでいただいているという、選ばれているまちだということに対して、大変嬉しく思います。短期的に見れば、やや人口増に対するインフラが追いついていないという部分もありますし、そういったところをしっかりと充実させていかなくちゃいけないということと、ずっと続いてきている人口増のトレンドも、2030年以降のことも見据えていかなくちゃいけないので、非常に厳しい舵取りだなと思っていますが。人口増と、それから社会増という意味で増えているということは、とても歓迎するべき話だと思っています。

記者： それで、移動、転入してくる先というのが、横浜、東京、それから一部横須賀なども入っているんじゃないかと思うんですけれども、いわゆる自治体間競争というんでしょうか、という視点で見ると、いわゆる地の利だけではなくて、選んでいるポイントというのはどこら辺だと思われませんか。

市長： 特に、人口増の集中しているところは、20代での転入が非常に多いという意味では、就職して初めてとか、あるいは結婚して初めて住むところが川崎市ということなので、1つには子育てしやすいというイメージはあるのかもしれませんが、細かく見ていくと、待機児童の話だとか、課題は多いというふうには理解していますが、しかし、この数年、川崎市のイメージというんですか、若い世代におけるイメージというのは、非常に飛躍的に高くなってきているという状況をあらわしているのではないかなと、前向きな見方をすればですね、そういうふうには捉えております。

記者： ありがとうございます。

《認可保育所の保留児童数について》

記者： 保育所の関係なんですけど、1月の一次利用調整ですか、この段階の保留児童がいわゆる3,747人ということで、去年の同じ時期よりもやや増えているということで、市として非常に受け入れ枠を拡大してきていると思うんですけれども、それでもなお、まだ申請が多いんだなという感じなんですけど、これ、4月に向けて、これをどうやってフォローしていくかというのが、今多分ご担当が一番努力されているところだと思うんですが、見通しとしてはどうでしょうかね。また今の保留児童数のボリュームに対する市長の認識と、今後の取り組みというか、一応待機児童解消とい

うことは目指されると思うんですけども、国の基準が上がったりとか、いろいろまた難しい部分もあると思うんですが、どんなふうに4月に向けて取り組まれるかと、見通しも含めて聞かせてください。

市長： ちょっと今の段階では見通せない状況なんですけれども、ただ、今年は特に幼稚園の預かり保育でありますとか、年度限定も昨年に引き続きやっていくだとか、とにかく、あらゆる、考え得る全ての手段を駆使してやってきていますので、そういった意味で、今、全力で努力してもらっているということです。

やはり、これだけ5年続けて待機児童対策をやってきていますと、各区の担当職員のノウハウが相当蓄積されてきているので、今年は、相談等々は非常にスムーズに、夜間、あるいは休日の取り組みも含めて進んでいると聞いています。

一方で、私も会合に行くたびに保留児童になってしまったという声とか、あるいは市長への手紙でも、利用調整基準みたいなことに対するご意見というのは多数いただいているので、深刻さは、これまでと全く変わらない、あるいは増しているかなという認識はしていますので、これだけつくっているのにという供給側の思いはあるんですが、それ以上に需要というのがすごく高いという状況ですので、整備もそうですし、あるいは質的な担保というのも同時にやっていかなくちゃいけないなというふうに決意を新たにしているところです。

記者： わかりました。

《中学一年生殺害事件について》

記者： 昨日、多摩川での中学生の上村遼太君が亡くなった事件から3年がたちました。改めて3年、裁判は終わっていますけれども、3年たったご所感を1つと、あの事件があってから、市が、教育委員会がどういうふうに対策をしてきたか、また変わったところがあれば教えてください。

市長： まず、昨日で3年ということでもありますけれども、決して風化してはいけない事件だと思いますし、このようなことが二度と起きてはいけないことでもありますので、地域や、あるいは行政の、学校や市長部局も含めてですけれども、全ての関係するところがうまく連携して体制を強くしていくということが、これまでも、そして、これからの課題であると思っていますので、そういったことにしっかりと取り組んでいきたいと思っています。改めて、3年たって決意を新たにしているところです。

それと、2つ目のご質問で、どんなところに取り組んできたのかということですが、けれども、例えば教育委員会でいえば、これまで、例えば不登校といっても、不登校の

定義が15日以上続いていてとか、30日とかと、いろいろ定義があったんですが、3日以上続けて休むと、すぐに、毎月連絡が上がってきて、そしてすぐに対応に入ると。各区の教育担当だとかが情報を共有してということもありますし、スクールソーシャルワーカーが連携して入るケースだとか、いろんな人たちがすぐに情報共有をしていこうという取り組みに力を入れてまいりました。

こういったことも含めて、この事件以降、地域包括ケアの取り組みもそうですけれども、地域の団体の皆様も非常に、何ができたんだろうということを各団体の皆さんも常に問いかけて、どうすればよかったんだろうということを問い続けてこられました。そういった人たちとの連携というのを密にしてきたつもりでありますし、よりそのことを具体的に、もっともっとしていかなくちゃいけないなどは思っております。

《鷺沼駅再開発について》

記者： 8日の日に鷺沼駅周辺再編整備に伴う考え方というのを公表していただきました。以前の会見の場でも、ほかのメディアさんからこの件については質問があったかと認識しております。市長は鷺沼の隣接地域に住んでおられるということで、ちょっと市長の個人的な考えで、住んでいるの生活実感での課題みたいなことになると、例えば市長はどういうふうに感じられるものなんでしょうか。例えば、この考え方によりますと、大きな施設、機能が、更新がないまま四、五十年がたっていて、高齢化や建物の老朽化が同時に並行して進んでいると。市長は生活の中で、そういうことをやはり実際にお感じになったりするものなんでしょうかという意味です。

市長： 日常生活の中で、1人の個人が毎日区役所に行くようなことはないですし、ただ、区役所に来られる方、頻繁に来なくちゃいけない方というのは、実は福祉だとか介護だとか、そういった何らかのケアが必要な方が区役所に来るケースというのは非常に多いわけですけども、そういうところに宮前区の今の区役所というのは坂がすごいところですから、そこに対する、何とかならないのという声が多いことは以前から承知しています。

今回の再開発に伴って重要なのは、やはり交通機能の充実だと思っていまして、そういう意味では、路線バスというものをどうやって充実させていくかと。例えば、基幹的な病院であります聖マリアンナへのアクセスにしても、宮前平からのアクセスというのはあるけれども、鷺沼からのアクセスというのが無かったりとか、拠点の、交通結節点というふうに、本当にまだ、なり得ているのかというと、十分ではないというところもありますし、そういう意味で、いろんなことが今回の再開発によって

改善できればいいなと思っています。

記者： ありがとうございます。検討の進め方、今後のスケジュールというのは頂戴しておりまして、いろいろ住民と一緒にやっていくことなんだと思いますが、その中で難題になりそうなことや心配されているようなこと、大きなハードルみたいなものというのは何かあるものでしょうか。

市長： いろんな市民の皆さんからの、特に区民の皆さんからのご意見というのは、公共機能をどうするのかというところが1つの大きな課題になるかなと思いますが、これは全ての区民にかかわることですので、当該地域の人たちだけというよりも、区民の丁寧な意見聴取、意見を聞くということは必要なことだろうと思っていますから、そのあたりはしっかり丁寧にやっていきたいなと思っています。

記者： この件で最後なんですけれども、いろいろ状況は違うんですが、例えば新百合のほうも似たような課題あるのかないのかと聞いていたりするんですが、他地域への、ほかの地域への何かいい影響、好影響への期待するような、この議論がですね、期待したいところというのはおありでしょうか。

市長： 非常に今回の話は、先ほど申し上げたような公共機能の話とか、あるいは交通網の再編ということも、多岐にわたってありますので、そういった意味では、今後他区のそういうことがあれば、1つの参考になっていくのではないかという気はしますけれども、ちょっとあまり具体的には思いつかないですね。

記者： すいません、抽象的な質問をしました。ありがとうございました。

記者： すいません、今の宮前区に関連で。

区役所、今30年ぐらいですかね、あの地区。そうすると、もうちょっと、例えば長寿命化って、今、方向性で管理されていると思うんですけれども、そうすると例えば60年とか、もうちょっといくんですかね、そのコストとの兼ね合いというか。でも、今ここで、あの場所で建てかえると、ほかに何かまた借りて、庁舎、また何かつくらなきゃいけないとか、いろいろ、それもまたコストがかかると。コスト面の考え方というのは、市長の中で、今の中ではどんな感じで考えておられるかと。

市長： さまざまなシミュレーションというのはあります。コスト面だけのことを考えれば、いろんな手法について、どうすればどういうふうな影響があるんだという、そういうスタディーはしていますが、ただ、今回の話は、単なるコスト面だけの話ではないと思っていますので。

記者： わかりました。

《県議会議員の定数について》

記者： 追加でもう一個なんですけれども、直接市政とは関係ないんであれなんですけど、報道ベースで恐縮なんですけど、県議会の定数見直しというか、定数是正というんでしょうか、2増2減で落ちつく方向でほぼ固まったということ、自分のところの新聞であれなんですけど。県西部のほうを多くして、増えるところは、今回川崎区と高津で1つずつ増える、県会議員さんが2人増える。このことに対しては、例えば市政から見ると、県政への声が強くなるとか、いろいろいい部分もあるし、もろもろ、いろんな考え方があると思うんですね。市長も県会議員をされていたときにいろいろ感じた部分もあるでしょうし、そのときに、例えば政令市の見解というのは、ちょっと権限が少ないので、そんなに要るのかどうかなのかという議論もあったと思うんですけれども、その辺で、どうでしょう、川崎市内の県会議員さんが増えるということに関しては、率直な所感というか、もしあれば聞かせていただければと思うんですけれども。

市長： 権限と定数というもので考えたくもなるんですけれども、1票の格差の話というのが、まずそのベースがありますから、そこをいじくることになる、より大きな議論をしないとそこには踏み込めない、そういった意味では、私も報道ベースで読ませていただいて、そういうところに落ちついたのかという、何ていうか、うん、なるほどという感じはいたします。何ていいますか、ちょっとうまい表現が見つからないですけど、苦肉の策というか、その中でよく調整をされたんじゃないかなとは思いますが、確かに、強制合区されて、あの広大なところを1人の議員さんでかというのって、ちょっと大変だよなというのは率直に思います。そして、川崎の、例えば1区で2名、3名いるところと、ものすごいアンバランスという感じはしますが、でも、それは、ある意味いたし方のない、神奈川県、ある意味特有のケースで、他の都道府県では起こらない事態なので、政令市が3つというのは全国1つしかない、特有かなと思います。

記者： とりあえず、1票の格差って、憲法とも絡んじゃう話なんですけど、そこを何とかしないと、今の状態というのは、今、市長が言われた、苦肉の策という言葉がされていましたが、それほどいい状況じゃないというご認識でよろしいですか。いい悪いの判断は別にしていないということですか。

市長： ではないです。県西部により多く配分すべきなのかといたら、そうとも思わないというか、そういう考え方で果たしていいのかというのがありますし、まず民主主義の前提としての1票の格差というのは、ちゃんと是正されていなくちゃいけな

いという、そこはあるので、そこと今の現実と、どうやってうまく兼ね合わせればいいのかなどというのは、何とも答えが出ないですね。何か、もごもご言っていてすみません。

記者： わかりました。

《未成年者誘拐事件について》

記者： 全く違う中身で2点、お伺いします。

1つは、先般、川崎市の高津区だったと思いますが、男性の自宅に少女が2人連れ込まれていたという事件が発生しました。これは、またちょっと、これまで起きた少年事件というものの、少年、少女が犠牲になった、被害者になった事件とは、必ずしも、これ、同じではない、実際けがをしたとか、そういうことでもないもので、行政として何ができるかというところはなかなか難しいと思いますが、ああした事件が川崎市内で起きたということに関する所感をまずお聞かせください。

市長： そういう事件が起こったということは、本当に遺憾でありますし、残念でありますけれども、これが川崎市内で起こったというのは、別に、どこにでも起き得る話だと思いますので、何となくご質問に対するコメントがしにくい部分がありますね。

記者： 何か川崎市に特有な事情とかで、こういう事件が起きたというわけではない。

市長： とは全く思いません。おそらくこういう家出だとか、これも社会的な問題になっていると思いますけど、家出したいとか、そこでネットカフェに泊まっているとかという若者が多いという現象も、報道ベースでもよくされているとおり、社会的な問題だとは思っていますけれども、その行き着いた先がこういう事件になっているんだとは思っています。

《武蔵小杉駅混雑対策について》

記者： もう一つ、全然違う話なのですが、鉄道のホームドアの設置の件で、これ、新年度の予算の中でも、新たに武蔵小杉駅を中心として、ドアの新設を担当する方なり部署を置くという方針が示されましたけれども、具体的にはどういった仕事をやってもらいたいと思っていられるのかということと、鉄道会社、特にJRに対して、どういう働きかけをするのが効果的だと思われるのでしょうか。

市長： 今回、担当を新設したというところは、さまざまなチャンネルでもって鉄道事業者と交渉してきている部分というのを1つにすることによって、ばらばらと要望していかないという、窓口一本化してまとめて、こういう状況ですから一緒にという、

相手もそういう形でうまく連絡体制というか、いろんな勉強会みたいな形でやっておりますので、そういったところの調整というのを一元化するというのが主な趣旨でありますので、さまざまある課題というのを窓口一本にして相手とやっていくことによって、認識を一致させることができるのではないかなと思っています。

記者： これ、例えば、国の中央の省庁とか、国政の政治家に対する働きかけとか、その辺もその部署でやるような形になるんでしょうか。

市長： 当然、その課だけでやるということではないですけども、そこは窓口になってくるとは思います。

記者： わかりました。

市長： 今のホームドアに関連してなんですけれども、市長が武蔵小杉以外で、極めてここの混雑は気になって、ここにホームドアもあつたらいいなと思うようなところがあれば教えてください。

市長： 混雑エリアというか、南武線そのものが非常に混んでいるということもありますし、横須賀線もそうですけれども、そういう意味では、どこと言わず、象徴されるのが武蔵小杉ということでありまして、大きな駅であれば、どこもホームドアというのは必要になってくると思っていますから、ここだここだという話ではなくて、大体ホームドアというのは沿線でやっていくというのが手法なんでしょうけど、私どもとしては沿線で捉えられるとなかなか進まないの、まずは小杉ということをやっていきますが、どこが1番、次は、2番はどこというふうに言ってしまうと、ちょっとおかしなことになりかねないなと思いますので、少しそこは控えさせていただきたいと思っています。

司会： よろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして終了いたします。ありがとうございました。

(以上)

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355